「もとはこちら」の お話し

No.74　今月のテーマ　**相対を超える**

講義中の平井謙次先生

忍耐は

百戦して百勝するにも勝る

最高の宝なり

（平井謙次作　日めくり　カレンダーより　）

北原ゆり筆

四月は門出の月です。

入学や入社、あるいは進学や転勤などで環境も一新し、希望と不安が入り混じる時期でもあります。

しかし中には、自分は大した変化もなく、日々、平々凡々の暮らしをしているだけだと言われる方もおられるかもしれません。しかし、意識するか否かの別なく、私達は誰でも一瞬の休みなく、常に変化し続けており、今までとはまた異なる、真新しさの中に今日も生かされているのです。

きのうと同じ一日など、絶対にありません。新しくてまっさらな今日という日の中で、起こって来る様々な出来事を、私達はみな「必然的に」体験しながら、今、このときを生きているのです。

それは、森羅万象その全てが、必然の連続によって刻々と変化し続けているからであり、私達自身が、その森羅万象そのものであるからに他なりません。

では今回も先月に引き続き、平井先生が遺されたお話しをご紹介させて頂きましょう。

～～～～～　相対を超える　～～～～～　平井謙次

先日来、暇にあかせて仏教伝道教会の仏教聖典という本を読んでいます。ホテルなどの各部屋によく備え付けられているあの本です。

実はこの本は、以前に一度読んだ事があり、読むのは今回が二度目です。

ところが３０年ほどの間に私自身が少し変わったせいなのでしょうか、以前とは全然違う本を読んでいるような気がするのです。

それでいつか大阪梅田の太融寺に麻生老師をお訪ねした時の事を思い出しました。

「麻生老師といえば、無財の七施」と言われるくらい、そのお話しで有名な老師ですが、講演を頼まれると、いつでもその無財の七施というお話しをされたそうです。

生涯、その同じテーマで、二千回ものお話しをされたそうですが、老師は「同じテーマで同じ様な事を話しても、その時々の自分の心境によって話す内容は全部違うし、聞くほうも、その時々によって解釈の仕方は全部違う筈だ」という様な事を仰っていました。

さてこの仏教聖典なる本ですが、こういういわゆる宗教書と言われるような本は、どこまで読んでも、またどれ程読んでも、それを読むだけで終われば、それは例えば薬の効能書きを読むだけ読んで、その薬を使わないのと同じようなものだと思います。薬は使ってこそ、その効果が表われるのです。

ですから何の体験もなく、ただ文字の字面を追うだけの読書家と、長く生き、色々な体験を重ねてきた人とでは、同じ書物を読むにしても、その解釈の深さは全然違うと思うのです。

ですから私もこの聖典を読みながら、現実の自分の生活の中で、ひとつでもふたつでも、いや半個でもよいから、現実にこの身をもって色々と体験をし、それを深めていきたいものだと心から感じました。

自分の本性を知る

さて、ではこの仏教聖典という本の狙いはどこにあるかという事ですが、仏教だけではなく他の宗教、例えばキリスト教や神道などにおいてもいえる事は、宗教の最終目標はいつにかかって、やはり身をもっての体験を通じて、『自分の本性を知る』というところにあると思います。

そして、この現実世界の不自由な中に身を置きながら、そしてそこにある様々なルールに従いきる中で、自在自由な境地を得るというところにあるという事です。

どんな宗教においても、その基本姿勢は『自由解脱を得る』というところにあります。

一如とか超越、あるいは永遠無限を知るという様な事を、身をもって、あるいは体験を通して獲得し、相対世界にこの身を置きながら、絶対の世界を知るということです。

私はこの本を読みながら、次のような事を深く、深く確信致しました。

あらゆる事は、即ち財産も地位も名誉も、そしてこの身体も、一切全てのものは宇宙からのいっときの借り物であり、その借りたものを使い切り、自由解脱を得るという事が、私達がこの世に生まれてきた一義であるという事です。

平々凡々な生活をし、朝になれば目覚めて床を立ち、昼間は少しでも人様のお役に立たせていただけるように働き、一日に二～三回の食事をし、夜になれば寝るという、そういう極あたり前な生活をしながら、何事にも、また何ものにもとらわれない自由な心境を得ていくということです。そして本来の自分とは、初めもなければ終わりもない、無始無終の、そして無限絶対の世界と完全一体の物であるという事を、全身全霊を通じて知るという事です。

薬を飲む、ということは

先程も言いましたが、どれ程すばらしい本を読んでも、また、どれ程すばらしい話を聞いても、それを自らが実行実践し、即ち体験しなければ、それはただ単に、良薬の効能書きを読んだというだけの事にすぎません。

ではここでいう、「薬を飲む」とは、具体的にはどういう事を指しているのでしょうか。

例えばオーケストラをひとつの例として考えてみましょう。

高い素質ある奏者が、日々、常人では考えられない程の厳しい練習を重ねていきます。

そして一流といわれる程の奏者となり、苦しみも楽しみも乗り越え、最後は楽器と溶け合い、楽器とひとつになっていきます。

そしてまた素質ある優秀な指揮者のもとで、他の奏者と共に厳しい練習を重ねていき、やがては自分という個の存在を越えて、全ての全てが完全一体となりきった時、それが、相対を超え、一元の世界、あるいは絶対の世界に到達したという事です。

その時には自分という存在は、オーケストラの奏でる大調和の中にあって、欠くことのできない存在でありながら、有って無いという状態となり、そこにあるのはただ悦び一元の世界のみという事です。

人間界の地位と境涯は　別のもの

しかし、超一流の人だけが、そういう一元絶対の世界を獲得できるわけではありません。

例えば、横綱を目指し相撲の世界に入門した人の中で、横綱にまで登りつめる人は、何千人の中で一人位のものだろうと思います。

入門してから人一倍、毎日練習に励み、節制に励み、相撲界のルールに従いきり、歯を食いしばっても、その人はフンドシかつぎで終わるかもしれません。しかしその境涯の点においては、もしかしたらそのフンドシかつぎの方が、横綱よりも遙かに上であるかもしれません。

人間界での地位の高さと、人間としての境涯の高さは、また別のものです。

自分の立場をわきまえ、目標をしっかりと立て、日々、その目標に向かっての三昧の生活であれば、やがてその道は通じ、いつかは自由解脱を得ることでありましょう。

芸術家は、芸術家として芸術家になりきり、スポーツマンはスポーツマンに、そして魚屋は魚屋に、先生は先生になり切ることです。「なり切る」ということは、「それを越える」ということです。

この「なり切る」ということを長く継続できれば、知らぬ間に私達は人間の衣を着た菩薩となって、自由解脱を得て法悦境の住人となることでしょう。

手段は何であってもいいのです。また、どんな門から入っても良いのです。今あるその環境中で、自分の置かれた環境の中で、「なり切る」その中でのみ、私達は法悦境を獲得できるのです。

人間界への入門者

私達人間は皆、修羅、餓鬼、畜生界を卒業し、今、人間

界に入門してきたところです。
その人間界で様々な苦楽を共にしながら切磋琢磨し、やがていずれの時か、人間界も卒業し、菩薩界に入門します。
そしてそこでもまた自分を磨き、向上させ、如来、天上界をも卒業し、またその上の界にと進んでいくのです。
そういう事を知った上で毎日、平凡でとらわれのない生活をし、この人間界という世界を楽しみ、或いは苦しみ、苦楽一如という事を身をもって味わいながら淡々とそのひと時、ひと時を過ごしきれたらな、と思う毎日です。
しばらくはこの仏教経典を読み進め、その行間を味わい楽しみながら読みきりたいと思っております。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

以上が平井先生のお話しです。
さて、麻生老師といえば「無財の七施」といわれると同様、平井先生といえばもちろん「もとはこちら」です。
もとはこちらとは、ひと言でいえば「自分が体験した事の、その全ての原因は、全部自分にある」という事です。
自分が体験した事のその原因が、時には自分にあるが、場合によっては相手にあったり、社会にあると考えているような事では、到底、自由解脱の道が開けてくる事はありません。まして、自分に何の原因も無く、落ち度も無く、自分は被害者だという様なことで、相手を責めるような心の姿勢で生きているならば、その人には尚一層の不幸が降りかかってくる筈です。ますます不幸になることで、その考え方は間違っているという事を、自然の摂理が教えてくれているのです。

いついかなる場合であっても、自分がそれを体験するには、体験するだけの原因が自分自身の中にあり、そして未来に向かっては、それを体験する必要が自分自身の中にあるのです。そういう自然の摂理を丸ごと受け入れ、もとはこちらの摂理に沿った心の姿勢で生きていくならば、その道は間違いなく、自由解脱の道に通じていきます。
しかしこの「もとはこちら」の考え方で生きて行く事が難しいのであれば、ここでまた平井先生の言われる「なり切る」という事を徹底して、道を開くという方法もあります。
即ち、もとはこちらの反対である、もとはそちら、即ち、一切の原因は自分には無い、という事を徹頭徹尾、貫くという道です。貫く事ができるならば、この道もまた必ず、自由解脱の道に通じております。しかしこちらの方の道は、常に不幸の影が付きまとう、より険しい茨の道になるでしょう。反して、もとはこちらの方の道は、穏やかで平和な道であり、自他ともに向上浄化できる人の道といえるでしょう。

〔ご案内〕
四月の勉強会は、四月十三日午後7時からを予定しています。
皆様のご参加を、お待ち致しております。
次回は、五月十一日午後7時からを予定しております。
勉強会及び月報については、左記までお問い合わせください。

編集発行人　もとはこちら会　資料編集部　北原友也
専用ＨＰ　http://www.motoha-kochira.com
mail:　data3@motoha-kochira.com
TEL　０７３・４６１・６３００